

幕末明治の写真師列伝 第三百三十六回 宮下欽 その五十四

一八九七年（註：明治30年）五月五日（一七日）、月曜。

「(前略) パウエル神父は、名古屋のイリヤ宮下にもイコンを贈るよう依頼している。これにも褒賞状の下書きが添えられている（まるで、わたしと沢辺では感謝状は書けないかのようだ！）わたしは、イリヤへの贈答用イコンもまた探しました。古式ゆかしい金箔の金属製飾り枠に収められた、真珠の栄冠をかぶった生神女(聖女)のイコンである。これも年代ものの修復画で、黄色い新品のイコン入れに記されているとおり、モスクワにある神の叡智ソフィア教会の女性信徒から寄進されたものだ。このイリヤにも教会への忠誠心と献金にたいする謝状を書く。（イリヤは、パウエル神父が九州からの帰り道、名古屋にも寄ってくれるようにと頼んでいる。Indeamor[このことから愛が感じられる]！（後略）

一八九七年六月二三日（七月五日）、月曜。

「(前略) シメオン[三井]神父は名古屋教会のことを誉めた。名古屋では、新たに購入された地所のうえに教会の家屋を建てる計画が提案されたと話した。また、こちらから贈ったイコンにたいするイリヤ宮下の感謝状を、神父は持参した。わたしがイリヤにイコンを贈ったことを教会一同で祝ったとの話。感謝のモレーベン[短い祈禱]が行なわれ、そのあとで会食が開かれたそうだ。（後略）」

（註：シメオン[三井]神父とは、三井道郎のこと）

一八九七年七月二二日（八月三日）、火曜。

「朝から晩まで、小冊子のカタログ作り。イリヤ宮下が名古屋から来訪し、[贈呈した]イコンに対する礼を述べた。しかし、このお礼には、聖堂建設の援助という暗黙の嘆願がこめられていた。ロシアから[宣教資金（つまり金本位制に基づいて）]が来れば善処しよう、とわたしは約束した。（後略）」

（註：この日、宮下欽が名古屋から上京していることがこの記述から判る）

一八九七年七月二三日（八月四日）、水曜。

「(前略) 村上、あのあごひげの白い男が、浅草から妻と息子をつれて別れを告げにきた。精米機（東京のある正教徒が新たに発明したもの）の店を開くために名古屋へ行くのだという。商売の目的は、名古屋の信徒たちの負債（教会堂を建てるため借金して土地を買った）を完済することだ。その店は、写真家のイリヤ宮下が自分の資金で開いてくれる。だから村上はただ、かれを手伝いに行くのだそうだ。村上の話では、名古屋教会は毎月一八円、利子と雑費に支払わなければならないという。この支出を[名古屋教会を代表して]イリヤ宮下がほぼすべて担うのだ。機械を一台売ると、一〇円の利益がでる。しかし、その利益は三つに分けねばならず、名古屋教会の手に渡るのは三分の一だけだ。それでどうやって借金が完済できるのかわからない。」

（註：東京のある正教徒とは、日本で最初の動力精米機を開発した佐竹利市のことと思われる。佐竹は、後に佐竹機械製作所を創立した）

一八九八年四月二九日（五月一日）、水曜。大阪から京都と名古屋へ行く。

「(前略) 日没前に名古屋へ着いた。伝教者ペトル柴山[準行]、教会の執事長イリヤ宮下、それからかなりたくさん信徒たちが駅で迎えてくれた。（後略）」

この明治30~31年（1897~1898）頃が宮下欽の一番いい時代であった。

中村敏著『日本キリスト教宣教史：ザビエル以前から今日まで』（いのちのことば社、2009年）所収、「名古屋ハリストス正教会小史」によると「この時期の名古屋での祈禱所は、市内桶屋町（現、名古屋市中区錦二丁目付近）にあった。この教会の所在地については、沿革では「名古屋市桶屋町七十八番戸」とあるが、第一回座談会では、磯谷光利から名古屋で伝教者を勤めたイアコフ萱野三次郎へ宛てた手紙に住所として「桶屋町園井組角」とあり、柴山準行（後述。後に名古屋教会で初めて専任の司祭となる。）が、同じく萱野に宛てた手紙には「桶屋町五十七番戸」とあるけれども、座談会参加者によれば、桶屋町蒲町西北角に間違いないということである。」この桶屋町の名古屋教会は明治30年（1897）に富士塚町三丁目7-2に新築される。しかしながら、この富士塚町の聖堂は第二次大戦の名古屋空襲により全焼してしまった。この聖堂の用地買収には、名古屋の写真材料商、横田商会も援助しているのだが、これも、横田商会の初代・吉助が、水谷鏗太郎（鏡）の友人であったことから、援助を受けたものという。

一九〇三年（註：明治36年）一〇月一四日（二七日）、火曜。

「ペトル柴山[準行]神父が以下のことを書いてきた。名古屋の教会執事で写真家でもあるイリヤ宮下が以前かれに託されていた教会の金を使い込んだのである。その額は三四円と多くはないが、そのためにかれは教会執事に再選されなかった。宮下は名古屋で最年長で、最良の信者の一人である。たとえ人柄がよくても、日本人を信用して金を預けてはならない、もしくは預けるにしてもきわめて慎重に行なうべきである、とは守るべき教訓の一つである。」

（註：この記述は重要で、宮下欽が使い込んだ金とは、先の村上との共同事業の収益の一部（名古屋教会の手に渡るべき金）だと思われる）

一九〇四年（註：明治37年）三月一六日（二九日）、火曜。

「ペトル柴山[準行]神父からの手紙、(中略) それから、写真館の宮下がとうとう破産してしまった。まことに残念！これまでかれは裕福な、敬虔な信徒だった。（後略）」

（註：村上との共同事業のは、おそらく明治37年（1904）に失敗して、ついに破産してしまったのであろう。）

この他に名古屋教会の宮下欽の足跡を知る参考資料として、シエツト婦人画報社編 雑誌『美しいキモノ』（アシエツト婦人画報社、2009年春号~2010年冬号）掲載、山下悦子「ある市井の一族の物語」（全8回）があり、これによれば、元は写真師であった神父・ペトル柴山準行、ルカ鈴木真一（岡本圭三）、柴山準行の娘・操の夫で水谷鏗次郎、水谷鏗次郎の兄・水谷鏗太郎（鏡）の水谷兄弟などの名古屋の初期写真師たちとの間に、名古屋教会の神父と同じ信者ということもあるが、深い交流があったことが判っている。

柴山準行は、宮下欽から写真術を学び、準行の弟子が水谷鏗太郎（鏡）という関係になる。さらに弟の水谷鏗次郎は、兄から写真術を学んだ。

そういう意味では、下岡蓮杖⇒横山松三郎⇒宮下欽⇒柴山準行⇒水谷鏗太郎（鏡）⇒水谷鏗次郎と、名古屋の初期写真館は下岡蓮杖に連なる系譜ということになる。また、初代・鈴木真一、二代目・鈴木真一（岡本圭三）も下岡蓮杖に連なる系譜になる。

（森重和雄）